



〒892-0841 鹿兒島市照国町13-42 カトリック鹿兒島司教区 電話099(226)5100 振込口座 02030-2-8359 編集発行 教区広報部 1部60円年間千共1100円

道標



Yet...Joy! Hope! Gratitude!

笑顔で司牧した五十年を記念

吉野教会で牧山一神父の金祝を祝う

牧山一神父(吉野教会主任司祭)が司祭叙階五十年(金祝)を迎え、九月二十五日(日)吉野教会で感謝のミサがささげられた。小さな教会には牧山神父の穏やかな人柄を慕って八十人余りの信者が駆けつけ、郡山司教らとともにミサをささげ、神父のこれまでの働きに感謝するとともに今後ますますの活躍を祈った。

佐賀県の北西端、玄界灘に浮かぶ馬渡島(佐賀県東松浦郡鎮西町)出身の牧山神父は、一九三二年生まれの七十九歳。一九六一年十月五日に故郷・馬渡島教会で叙階され、その後の十一年間を福岡教区司祭として、久留米教会、建軍教会で司牧に携わっていた。ところが一九七二年十月にそれまで指宿教会を担当していた山頭原太郎神父が泰星高校立て直しのために福岡教区に移籍となったのに伴い、福岡教区から鹿兒島教区へと転籍することとなり

指宿教会に着任したのである。突然の移動に際し、牧山神父は司祭叙階の時の挨拶「必要とされる場所ならどこへでも行く」を思い出し、その転籍の要請を受け入れたという。以来、牧山神父は枕崎主任、司教館勤務、名瀬聖心教会主任、種子島教会主任など歴任し、二〇〇六年から吉野教会主任司祭として、また同付属幼稚園の園長として働いている。



司教の隣りでミサをささげる牧山神父

松森、フリチエルの両司祭と喜界島から四條助祭も駆けつけ、牧山神父の金祝を祝った。ミサ後は隣接する幼稚園のリズム室で祝賀会があり、名瀬聖心教会などから

送られた祝電が披露されたほか、信徒代表、郡山司教がお祝いの言葉を述べた。その後、感謝の言葉で五十年を振り返った牧山神父は、司祭職への憧れを持っていた幼い頃の思い出や何度も司祭職への道を諦めようと思ったことがあるというエピソードを披露し、感慨深げに「よく司祭になったと思う」と心のうちを披露した。大勢の信者で埋め尽くされた会場は、喜びの笑顔が溢れ、穏やかな牧山神父ら

ボランティア募集

東日本大震災支援

岩手県大槌町を拠点とした「東日本大震災復興支援」に乗り出した長崎教会管区では、二〇一四年三月までの間に活動してくれるボランティアを募集している。問合せは「長崎教区サポートセンター」古木真理一神父または長崎教区

新風

一九八七年に開催された福音宣教推進全国会議を受けて司教団は「ともに喜びをもって生きよう」を発した。宣教する側にも常に喜びの福音でなければならぬ。教区の日知ることのできた「ワークワクする」そんな宣教を通して試みて、特に家族を通して試みたいのである。

よろこび

ワークワクする宣教。つまり喜びの宣教生活の源はキリスト以外にはあり得ない。先に開催されたWYDのテーマも「キリストに根ざして生きる」であった。今、私たちは深い黙想と祈りの中にワークワクする宣教に旅立ちたいと思う。

二〇一二年十月「キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教」をテーマにしたシノドス第十三回通常総会が開催される。宣教こそが最高の喜びであることに気づき始めている私たちは、司教様の「それでも」の精神に養われながら最も身近なところから始めたいと思う。(教区本部・寝占敦之)

「短信」

武内アイソ修道女

お告げのフランシスコ姉妹会の武内アイソ修道女が、九月二十五日(日)入院先の東京都大田区の病院で管内胆管がんのため帰天した。八十三歳だった。大笠利出身のシスターは、一九四七年に同会入会。一九五〇年に初誓願を宣立し、以来、六〇年以上各地で奉仕の仕事に従事していた。

(報告・平 三國)

水害復旧工事終える

西仲勝教会

昨年奄美大島を襲った集中豪雨で床上浸水した西仲



福者レオ七右衛門殉教祭

11月13日(日)



レオ七右衛門像(都城教会所蔵)

プログラム

13時 14時 14時30分

司教ミサ 殉教劇とWYD報告 出演 WYD参加者 巡礼出発

▼マリア山荘黙想会

十月八日、九日、マリア山荘で気をテーマにした黙想会とセミナーがあり、二十五人が鹿兒島はもとより宮崎からも参加し、小佐野工学博士(会津大学名誉教授)から熱心に学んだ。

▼フランシスコ祭

アシジの聖フランシスコの記念日である十月四日(火)、コンベンツアル聖フランシスコ奄美修道院のある古田町教会で恒例のフラ



りの集まりが九月十九日と二十日の二日間、教区本部で開かれた。

教諭募集

垂水カトリック幼稚園

「募集条件」

- ①モンテッソーリ教育 デイプロマ取得者 ②モンテッソーリ教育ミニコース修了者 ③モンテッソーリ園で三年以上の勤務経験者 ※12月までに勤務可能な方ご連絡下さい。

TEL 0994-32-0138(担当者・郡山)



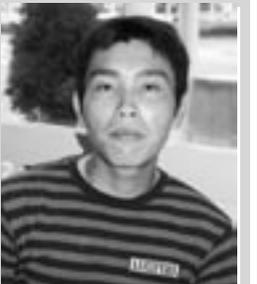
加治原 誠君



池之上直美さん



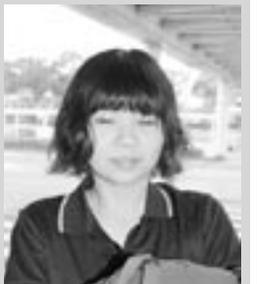
増田 滯さん



大山輝晃君



杉山志文君



松菌みなみさん



久保篤志君

加世田 大山輝晃

僕は幼児洗礼だが、物心つく前に両親が離婚。でも熱心な祖父や母のお陰もあって「将来、神父様になりたい」と思うようになっていた。そして中学一年の春、喜びの信者さん達に見送られ、神学校のある宮崎へと行った。けれどまだ中学生、朝は早いし、嫌いな勉強の時間もある、大好きなサッカーもできない、料理以外の身の回りの事をすべてしないといけない、なかなか心許せる友達も出ない、当時の僕にはすべてがきつく感じていた。その結果、信者さん達のお祈りの甲斐なく中学三年になる頃、退学となった。その時、寮に迎えにきた母の顔は今でも覚えている。地元に戻ったが、喜びに見送られた分、信者さんに合わせる顔がなく教会に行かなくなった。

高校には進学したものの目的がはっきり分からず、自主退学。でも母に安心して欲しかったからすぐ仕事を始めた。その頃、音楽にもはまっていった。見失った未来を音楽が変えてくれた気がして、本気で音楽活動をするようになった。そして東京へ。その後オーストラリアへ留学した。

帰国後は大阪へも行ったが、そこで三年目になるうとする頃、兄が実家を出た。そのため実家へと帰った。転々としている時は色んな教会にお世話になってきたが、鹿兒島では今でも神学校をやめたこともあって行きにくい。帰って来てから全然行っていない。母からこのWYDの事を知らされた。準備の中で「巡礼百km」という言葉が目

が止まった。距離はどうでもよく「目的の地を目指し祈りながら歩く」ことにすごく魅かれた。悩みも多くなる年頃だったし、何かがあるキリできそうなきがした。美しい教会を見ながら巡礼した町並みを見ながら巡礼は続いた。ゴールの瞬間、そこには昔テレビで見てこ

こには絶対行ってみたいと思っていた大聖堂があった。興奮冷めやらないまま、中に入ってみるとそこは本当にあこがれていた場所だった。聖ヤコブの聖堂。歴史を感じたというより、イエス様の足跡を見た気がした。

イエス様を本当に身近に近く感じた気がした。これからこの経験で僕がどう生きて行くかはまだ分からないけど、きつとまたいい方向に向ける気がする。

参加したWYDでの「巡礼百km」という距離は自分の人生のなかで一度歩か歩かないというような長い距離です。歩くなかで、足が痛くなったり疲れがたまったり日に日に歩くペースが遅くなり始め、もう歩けないと何度も立ち止まろうとしました。ですが、自分のペースにあわせて一緒に歩いてくれたり、頑張ろうと何回も声を掛けてくれたりする人、周りの人達に助けられて歩くことができました。自分一人だったら立ち止まり百km歩ききれないと思います。サンティアゴの大聖堂に着いたときは、思わず涙が出てしまいました。歩ききったという思いもあります。大聖堂を見たことにより今まで歩いてくるなかで考えていた不安が全部吹き飛ばされたような思いに、涙がでました。目的がなく不安になっていた巡礼ですが、目的がなくてもただサンティアゴの大聖堂を目指して歩くと

た。何百万の人がWYDに参加するために集まったというのに、日本では少ない宗教だと思っていました。世界には、こんなに仲間がいるのだと実感することができました。今まで適当に教会へ行っていたことを少し反省しました。

本大会中はみんなで話したり、意見交換をしたりする活動をしました。そこで今まで考えたこともないようなことや、自分が体験した信仰体験についての話を聞きました。それぞれの人が神様へのかかわり方が違い、考え方も違っていたので、自分のことも考えられるいい機会になりました。

今まで自分がカトリック教といることを人に話すことに抵抗がありました。しかし、WYDを通してカトリック教であることに誇りを持つことができた気がします。そして、カトリックでよかったと思っています。

溝辺 久保篤志 トウイからサンティアゴまでの百kmの巡礼は、はっきり言って疲れました。でもそんな中でも、色々な風景やそれぞれのことを話し交流、そして分かち合うことができたと思います。また一人で黙々と歩く時は、疲れや足の痛みなど大きく感じ自分が弱っていることを実感しました。しかしそんな時こそ自分自身のことを深く思い巡らすことができた素晴らしい時間だった

と今は感じていません。疲れましたが、だからこそ支えてくれる人の優しさや、またその人を通しての神さまのお恵みを感じました。そして、巡礼の目的の地であるサンティアゴでは、色々な国の巡礼者や日本人以外のWYD参加者が多くいました。そして大聖堂で、他の国と合同でミサを行い、聖堂の天井から吊るしてある大きな香炉が振られるのを見る事ができました。ミサは日本でも受けていますが、こんなにミサに感動したのは初めてでした。

サンティアゴを後にして、WYDが開かれるマドリッドに行きBコースの青年達と合流しカテケージスや分かち合いを三日間行いました。カテケージスの一日目は「ゆるぎない信仰」というテーマで鹿兒島が担当し、祈りや「証」という題で青年達が聖フランシスコ・ザビエルやレオ税所七右衛門の劇をして、郡山司教さまの講話などが行われました。私はWYDを作り上げられた

る一つに携われたことを嬉しく思いました。三日間のカテケージスが終わり、翌日には教皇ミサとその前の前晩の祈りが行われる会場に向かいました。そこには二百万近い人たちがいました。ここに集まる人々がキリストの名の下に集まっていることに驚き、そして言葉も文化も違うのに祈りやミサを通じて一体感を感じることができたことに感動しました。

WYDで私は色々な初めてを体験しました。海外に行くことや百km歩くこと、日本語しかできないのに色々な国の人と交流できたこと、国によってこんなに雰囲気が違うこと、しかし信仰していることは本当に一緒であること、その世界の人々と共に教皇ミサに授けられたこと、本当にまだまだあります。この体験を是非もっと多くの人に感じて欲しいと思いました。

鴨池 杉山志文 千年以上の歴史をもつサンティアゴへの巡礼の旅は長崎や天草などの巡礼は経験があったが「徒歩」で巡礼の旅というのは初体験。百kmという長い道のりを寝泊まりしながら旅をするという体験は自分には皆無。少し不安を持ちながらも、未知の出来事に期待をもっていた。歩き始めて気づいたことは幾つかありどれも心に残るものばかり。良い事、悪い事一つずつ上げるとすれば、良い事は歩き

僕らがスペインの地で見つけたもの ②

WYDの旅を終えた14人の若者たち！
たくさんのお祈りと支援に感謝！





岩崎信幸君



河野里実さん



林 聡一郎君



池之上ジョナサン君



大牟禮裕香さん



河野朱美さん



園田克也神学生

ながら目に入る風景が異国・スペインの風景であること。日本とはまったく趣が違ふ石造り中心の家、塀が道が自分に「異国の道を歩いている」ということを強く心に刻んでいた。悪い事は、自分が思っていた以上にスペインの大地は険しかったことだ。よく日本の大地は「高低差が他の国とくらべて激しい」と言われているが、スペインも歩くには十分に苦になる道のり。山という山を越えていかなければならない五日間の旅はスペイン・ヨーロッパの大地の険しさを知るのに十分な経験だった。

また日本との違いと云えば当然なのだが、そこに住む人達も大きく違うという印象を受けた。巡礼中、突然横切る車からクラクションを鳴らされるのが度々あった。最初は不安に思ったが、これはサンティアゴまでの道のりを歩む巡礼者を応援するクラクションだったようだ。また歩いていると現地の人々が挨拶や応援の声をかけてくれるなど公的なイベントでもないにも関わらず積極的に交流してくれていた。スペインの温かさなのか、カトリックの地である以上、同じ神を信仰している者同士の励ましなのかは定かでないが心に残り嬉しい体験だった。人と土地が全く違う地を歩くという経験は単に思い出さなくなった以上一つの貴重な勉強にもなった。自立し、もともと成長した後、再びこの道程を歩んでみたい。

WYDを終えて(総括)

青少年担当司祭 泉 浩二

教区から十九人が参加したWYD。一人ひとりが色々な経験、沢山の恵みを頂き、無事に帰ってきました。皆さんの霊的、物的な支えに心から感謝いたします。参加した十四人の青年たちも巡礼中、そして帰ってきてからも感謝の気持ちでいっぱいです。それだけ沢山のお恵み、感動を体験したのだと思います。

私自身も三年前のシドニー大会に比べてもより多くのことを感じさせられました。一つは今回鹿兒島からの参加者が多く、それに伴って沢山の方々が興味を示し、支えて下さったこと。もう一つは日本からの参加者が三百四十人もいたことです。同じ信仰を頂いた若者たちが色々な形で今回の情報を知り、興味を示し、一つに集まった

ザビエル 加治原 誠
WYDで私学んだこと、それは「ありがとう」がどれだけすばらしい言葉であるかということでした。スペイン語ではありがとうを「グラシアス」と言います。海外旅行初の私は、ちゃんと海外の人々と会話をすることができたのかというのが、一番の不安でしたが、実際にはそんな不安は無用だったようです。ジェスチャーでどうにか伝わりまし、スペイン在住の園田神学生にものごく頑張ってもらった部分もあります。が、スペイン語であいさつの言葉「オラッ！」とグラシアスだけでけっこう何でもいけていました。

自由時間で闘牛場に行くときも、私が闘牛のマネをしたら駅員さんに伝わって無事闘牛場に着くことができた。教皇ミサの前夜は野宿で、ものすごい雨が降ってきて、教皇様もまわりを傘で埋めつくされてしまいました。しかし、ちよつとしたら雨が止み、そのとき教皇が言った言葉が「グラシアス」だったのです。このときの世界中の青年たちの歓声は今も忘れられないし、二週間行つて一番感動したときでもありません。たぶん、人生でこんなに「ありがとう(グラシアス)」を言いまくった二週間は無いというくらい言つたと思います。

また、世界中の青年たちと、鹿兒島教区以外の日本の青年たちとたくさん交流することができました。午前中に日本巡礼団だけでカテケージスを行い、グループごとにたくさん分かち合いをしました。その時鹿兒島教区ではレオ七右衛門を題材に「揺るぎない信仰」を劇で分かりやすく伝えることができたと思います。世界の青年たちに私はお土産として折り鶴をたくさん折っていき、劇で使ったちよんまげをかぶって(笑)、いろいろな国の人々と楽しく交流することができました。こんな貴重な経験ができたのも、周りの方々がたくさんのお祈りとご支援があったからだと思います。

谷山 増田 澤
ホタテの貝殻をさげ、トウイ大聖堂からサンチャゴまでの百kmの巡礼は熱中症対策もあって朝早くの出発。人付き合ひの下手な私でしたが、最初の二三日は何とかみんなと楽しく過ごさることができました。でもやはり途中から悪い癖が出て、人とかかわること、人のペースに合わせるのがきつくなり、自分一人で歩きました。すると、特に分かれ道などになるとどちらに進んだらよいのか分からなくなり、不安な気持ちが多くわき起こりました。幸い、朝早くにもかかわらず近所の人が助けてくれたり、ずーっと前を歩いていると思つた鹿兒島の青年と会つたり。：「神様、ともに居てください」とあんなに強く祈つたのはこのときが初めてかもしれません。巡礼の道のりは自分たちの人生。人生は巡礼と同じだよ。自分は今、どこを歩いているかを考えながら歩くという。最初に言われた神父様の言葉。この言葉が心に染み入る巡礼となりました。

本大会に入ってから、マドリッドでは珍しい雨が降りました。しかも強風にすごく強い大雨。会場に折りのスペースが作つてあったのですが、屋根が吹き飛んだらしく、次の日には安全のためか、天井は骨組みだけになつてました。でも不思議なことには、教皇様の聖体賛美式の時には、雨はもちろんなこと風もやんで、式自体にまったく影響はありませんでした。

今回のWYDで学んだ「ありがとう」の言葉のすばらしさを感じたことを大事にしていき、これからもいろいろな方々へのかかわり、神様とのかかわりを大事にしていきたいと思います。

本大会に入ってから、マドリッドでは珍しい雨が降りました。しかも強風にすごく強い大雨。会場に折りのスペースが作つてあったのですが、屋根が吹き飛んだらしく、次の日には安全のためか、天井は骨組みだけになつてました。でも不思議なことには、教皇様の聖体賛美式の時には、雨はもちろんなこと風もやんで、式自体にまったく影響はありませんでした。

「希望を失わないでください」これは第二十六回「世界青年の日」教皇メッセ「イエス・キリストに根を下ろして造り上げられ、信仰をしっかりと守りなさい」の中で特に私の心に響いた言葉です。「むしろ、キリスト教共同体の支え、教会の支えを求めてください」と続きます。この一年間同伴者としてWYDへ向けて準備にかかわってきました。募集の際「うちの教会には若者がいない」とはつきり言われ、少し前までは「若者の教会離れ」と言われていたのが今では「いない」という状況にとても悲しい思いもしました。

そうはいっても昔走り回つていた子ども達はどこへ行つたのだろうか、一人でも二人でも出会うことができればと、WYD対象者(十八歳〜三十五歳)で洗礼を受けている若者がどれだけ鹿兒島にいるのか見てみると千七百人もいました。みんな元気だろうか。悲しい時、苦しい時帰る家を探してはいないだろうか。そんなことを思うと胸がいっぱいになりました。

WYD本大会には、教会や青年会のことにかかわっている若者たちばかりが参加したのではありません。「小さい頃はよくごミサへ行つていたけど、今は行つていない」という青年も多く、教会の主任神父様やご両親から声をかけてもらつて参加した青年も多かつたように思います。それでも小さな頃に培つた信仰はちゃんと根を下ろしていて、ゆるしの秘跡を静かに準備する青年の姿、聖体礼拝で教皇様が祈り始めると二百万人も青年が静まりかえり祈る姿は本当に輝いていました。その青年たちの祈る姿に出会い、「教会に若者はいる」と確信し、また鹿兒島の千七百人の若者のことを祈らずにはいられませんでした。

シドッチ祭のお知らせ

11月23日(水) 屋久島教会

①ミサ(午前8時) ②屋久町主催「シドッチ祭」(午前9時) ③茶話会(式典後)

参加希望者は教区巡礼委員会へ

寝占神父 TEL 099 (226) 5100

徳永委員 TEL 090-3669-0423

+KABAYAN SEKSIYON+

"MGA GAMPANIN NG KREDO-Letra K"

(Pagpapahayag ng Pagkakakilanalan)

Ikatlo,sa tulong ng Kredo,nagkakaroon ng saligang batayang ng sa-riling pagkakakilanlan ang mananampalatayang Katoliko.Sa pagpapahayag ng Kredo,kinikilala nating mga Pilipinong Katoliko,na ang ating pangunahing pagkakakilanlan ng sarili ay,nagmumula sa pagkukusa ng Diyos sa paglikha sa atin sa pamamagitan ni Kristo at ng Espiritu Santo upang maging isang sambayanan.Ang bawat isa sa atin,bilang mga binyagang Katoliko ay maaaring makapagsabi kaisa ni San Pablo"...hindi ako ang nabubuhay kundi si Kristo ang nabubuhay sa akin.At habang ako'y nasa daigdig,namumuhay ako sa pananalig sa Anak ng Diyos na umiibig sa akin at nag-alay ng kanyang buhay para sa akin"(Ga 2:20).Sinabi ni Kristo sa bawat alagad niya: "Hindi kayo ang pumili sa akin,ako ang pumili at humirang sa inyo upang kayo'y humayo at mamunga, at mamunga, at manatili ang inyong bunga"(Jn 15:16).

Samakatuwid,para sa bawat Pilipinong Katoliko,kinikilala ng Kredo kung sino tayong mga Katoliko at ano ang ating pinaninindigan bilang mga alagad ni Kristo,na nagkakaisa sa Kanyang Simbahan.Sa ganitong gampantin, ang pampublikong pagbigkas ng Kredo sa Misa tuwing Linggo ay nakatutulong sa atin sa maraming paraan.Una,pinag-iisa tayo nito bilang isang sumasambang pamayanang Katoliko na nagkakaloob sa bawat isa sa atin ng lakas at pagtataguyod.Ikalawa,nagkakaloob ito ng basehan para gabayan ang ating maalab na pagkarelihiyoso at kabanalang pandebosyon,at sa paghugsa sa napakaraming mga pangkat na pangrelihiyon at mga sekta na biglang nagsulputan sa ating bansa nitong mgaa nakaraang taon.Ikatlo,nakatutulong din ito lulu na sa pagbibigay-kahulugan sa ating mga karanasan sa araw-araw sa paraang tunay na maka-Kristiyano.Ikaapat,naglalagay ito ng isang bukas at malayang pakikipag-usap sa mga pangkat at mga Pilipinong hindi Kristiyano.

Ang sama-samang pagpapahayag ng ating pangkalahatang pansam bayanang pamana bilang mga Katoliko sa Kredo ay maaaring magbuklod sa atin nang higit sa anupamang bagay.Mayroon tayong katiyakan sa pagharap sa iba sa pagkakaroon ng isang pangkalahatang batayan na malalim at pangmatagalan nang higit kaysa anumang maaari nating magawa sa ating sarili.Ang Kredo ay maaaring maging isang mabisang pamamaraan upang unti-unting mabuo ang isang tunay at personal na "diwa ng pagiging kabilang" sa Simbahang Katolika,isang damdamin ng pagiging "nasa sariling pamamahay."

Ang itinuturo sa atin ng Inang Simbahan ay lubos na nakakatulong sa lahat ng tao na naghahanap ng katotohanan, katotohanan na walang ibang iniwan ang Panginoon Hesukristo na sa pananampalataya at pagmamahal ay makilala ang tunay na Diyos na Buhay. Kaya ang buhay na ibinibigay sa atin ng Diyos ay dapat nating pahalagahan.

Katekismo-Pilipinong Katoliko (Fr.Dino Orolfo)

終身助祭制度について
阿久根 石神秀人
今年三月に終身助祭に叙階されて、約半年が過ぎました。終身助祭という言葉はまだまだ教会の中でも定着してないし、いまいち制度自体も理解されているとは言い難い現状です。それはなぜかと考えると「終身助祭としての奉仕職って何？」という根本的なことが信者の中でもよく理解されていないからだと考えます。助祭は司祭ではない

のでミサや赦しの秘跡などはできませんが、その一方、ある特定の専門的な分野で教会に奉仕するということが出来ます。例えて言うなら司祭は祭儀を中心とした広範囲での神への奉仕、助祭は司教直属のある分野の専門的奉仕が可能と言えないでしょうか。さらになん

と言っても特徴は妻帯者でもなれると(一部条件あり)いうこと。単に否定的にのみ捉えるならこの奉仕職は成り立ちません。このことを私たちは見方を変えて、肯定的に理解してみたいのです。反対に妻帯性を活用することにより働けるという考え方が今の私です。妻の協力があってこそ仕事ができるかと痛感しています。奉仕者としての助祭、今まで神父としてやることに無理がある分野などに力

を發揮できるのではないかと考えます。
終身助祭は男性が三十五歳から奉仕できるのです。鹿兒島教区も六年前から始めたこの制度。ネット上などでは制度自体の有効性などを問う書き込みや聖体奉仕者で十分とか、妻帯者が聖職者とはどうか、司祭不足の穴埋めの処置、教会の政治結社利用か、など意見もさまざまです。新たな試みを行おうとする波風

スーさんの「やさしい言葉」⑥

掛け替えのない一片

伝統的なステンドグラスはジグゾーパズルのように一つひとつのピースがつなぎ合わさって図柄が出来上がっています。意外と気付かないことなのですが、それぞれのピースは形が違うことはいくらでもありますが、たとえ同じ色であっても微妙に色合いが違うのです。実際に、ステンドグラスの荘厳な美しさは、このピースの違いにある、と思えるのです。例えば、もし青色の背景を作ろうとして、機

械的にまったく同じ形と色をもったピースを合わせても、確かに整然とした描写は印象に残るものの、きつと平面的な味気ないものに仕上がってしまうのではないのでしょうか。このように考えると、それぞれのピースの違いがそれぞれを生かし、そして全体として重厚な美しさを醸し出している、と言えるかもしれません。私たちは家族、会社、そして教会といった様々な社会に属しています。そしてその中では他者との軋轢がどうしても生じるものです。しかし、相手を非難したり排除したりする前に、他者の良さを生かすことを先に考えたいでしょうか。一緒に何かをするのであれば、相手の存在を生かすことにより、自ずと自分の存在も生きてくるもので、アイエス様が語られる隣人愛とは実

はこのようなことなのです。イエス様が語られた最も大切な掟「神への愛と隣人愛の実践」とは一体何のためなのか。それはこの世界が神の国となるためなのです。神様は私たち一人ひとりをつかっただけで満足していません。私たちはその部分であり、ピースでもあるのです。だからこそ一人ひとりに違いがあるのです。神の国が実現するとき、そのステンドグラスが完成します。今の私たちが置かれている環境は神様の御手の内にあることです。ですから、他者との違いを生かす真の隣人愛の実践に努めてみましょう。それが神の国の民である私たちの生き方ではないでしょうか。

声

ついに足場を撤去 再生中の旧ザビエル教会



再生中の旧ザビエル教会

が起きるのは当然のことです。これはイエス様の宣教でも証明済みだからです。鹿兒島教区は現在六人。まだ六人なのか、または六人もいるのかと皆さんもそれぞれ考えてみて下さい。

文芸

俳句

霧島市 政ノブ子
鹿兒島 徳永ノブ子
奄美市 林 常広
奄美市 山頭 信子
純心学園 出水市 弘子
天高く唱和で祈るアベマリア 川上 和
鹿兒島純心 夏草や命の一節赤く伸び 愛光園 春山マリ子
今日も暮れ柿の実赤く明日を呼ぶ

短歌

鹿兒島純心 川上 和
司教様宮島沖の波に乗り漁り始む新網打ちて

11月の会と催し

- 1日(火) 諸聖人
- 2日(水) 死者の日
- 3日(木) 召命の集い・カトリック神学院福岡キャンパス
- 5日(土) 死者のためのミサ・カトリック唐湊墓地・10時
- 6日(日) 年間第三十二主日
- 7日(月) 司祭評議会・教区本部・10時
- 9日(水) ラテラン教会の献堂
- 13日(日) 年間第三十三主日
- 15日(火) 奄美例会
- 19日(土) ホリスティック聖書講座「モーセに学ぶ―試練と恵み」・ザビエル教会集会室・18時30分
- 20日(日) 王であるキリスト
- 21日(月) 聖書週間・27日まで
- 23日(水) シドッチ祭・屋久島教会・「8時ミサ、9時屋久町主催式典・式典後に茶話会」
- 26日(土) 青年キャンプ・27日まで
- 27日(日) 待降節第一主日
- 30日(水) 聖アンデレ使徒

詩

肉親の愛を感じて生きて居る辛さで重い心満たされ 愛光園 春山マリ子
聖堂の窓の淡淡い夕日指し悲傷の顔のイエス頂垂る 鴨池教会 前田 儀子

最後の言葉

長姉からの久々の電話
気になっていた身体の体調に
姉は不治の病を告げた
思ってもいなかった私の口から
十字架のキリストの言葉が飛び出した
傍らの盗賊にかけられた愛の宣言
すばらしい話ありがとう
今日のお話うれしい
八十六歳の豊かな人生をまっとうしたと
家族らの知らせが数日後あった
さわやかな姉の最後となった
喜びの言葉が忘れられない